

聖書:イザヤ書7章1~17節

説教:神はわれらとともにおられる

はじめに

先週より待降節に入り、今日は二本目のろうそくに火が灯されました。主イエス・キリストは闇の世に光となって来てくださったと聖書にあります。普段ならばこの世が闇だと感じることはなかったかもしれませんが、コロナ感染がますます広がっていくとき、この先がどうなるのかまったく見えなくて闇であると実感する方も多いでしょう。

イザヤは、戦争の噂がしきりに聞こえてきて、明日どうなるのかまったく分からない闇のような時代に、神のことばを語り続けた預言者であったと言えるかもしれません。イザヤの時代、人々は何を恐れていたのか。そんなとき、神はどのようなことを語ってくださったのか。それはまた今の私たちにとってどんな意味があるのか。ともに考えてまいります。

## 1 ユダの王アハズの時代

### 1) アッシリア帝国の脅威

まず1節から。「ウジヤの子のヨタムの子、ユダの王アハズの時代、アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、戦いのためにエルサレムに上って来たが、これを攻めきれなかった時のことである。」

週報のアウトラインに簡単な歴史年表と地図を載せました。オンラインでご覧の方は、教会のホームページに掲載していますのでご覧ください。

時代は紀元前735年頃のことです。そのときのユダの王がアハズ。1節に出て来るアラムは、いまのシリアからイラクのあたりを支配していた国でその王の名はレツイン。そしてそのときの北王国イスラエルの王がペカ。そこへ、チグリスユーフラテス川上流を支配していたアッシリア帝国が大きな力をつけて南にあるアラムや北王国イスラエルと南王国ユダを支配しようと狙っている。これが今日の箇所背景です。

### 2) 同盟の提案を拒否したためにエルサレムが包囲される

小さな国がひとりで大帝国アッシリアに立ち向かうことはできません。であればどうするか。普段は仲が悪い国同士でも、アッシリアは共通の敵ですから、ここは利害関係が一致して北王国イス

ラエルとアラムが同盟を結ぶことにします。しかしこれだけではまだ力が足りません。南王国ユダのアハズにも声をかけて同盟を結び、ともにアッシリアに立ち向かおうと提案をする。ところがアハズはこの提案を拒んで、アラムと北イスラエルを敵に回してしまう。そのあとどうなったか。

2節です。「ダビデの家に『アラムがエフライムと組んだ』という知らせがもたらされた。王の心も民の心も、林の木々が風に揺らぐように揺らいだ。」エフライムとは北イスラエルのことです。アラムと北イスラエルは、アハズが提案を断ったことに怒り、腹いせにエルサレムを攻めてくる。こういううわさが町中にばっと広がり、人々が動揺していきます。こんな場合リーダーの力量が問われます。リーダーはしっかりとふんばりながら、混乱している民衆に対して、一緒に力を合わせて困難に立ち向かいましょう、と団結を呼びかけなければならない。ところがまだ二十代であったアハズはうろたえてしまう。そんなリーダーを見たらだれでもますます不安になるばかりです。

アハズ王が、三国同盟のプランをなぜ拒否したのか、理由は分かりません。もしかすると彼のプライドが許さなかったということかもしれません。いずれにせよ、提案を断っても、彼らはなにもしないだろうと楽観的にとらえていたのでしょう。万が一のことはまったく考えていなかった。ところがまさかの事態が起きてしまいます。

## 2 イザヤ

### 1) 主のご計画 (第二列王記15章37節)

第二列王記15章37節には、このような事態になった背後に主のご計画があったと書かれています。どのような計画だったのでしょうか。このとき、預言者がイザヤが遣わされ、こう語ります。4節。「気を確かに持ち、落ち着いていなさい。恐れてはならない。あなたは、これら二つの煙る木切れの燃えさし、アラムのレツインとレマルヤの子の燃える怒りに、心を弱らせてはならない。」

なぜ恐れる必要がないのか。7、8節。「神である主はこう言われる。それは起こらない。それはあり得ない。アラムのかしらはダマスコ、そのダマスコのかしらがレツインだから。——エフライムは六十五年のうちに、打ちのめされて、一つの民ではなくなる——」

実際にレツインはこの後アッシリア帝国の手で殺されます。ここでエフライムと呼ばれている北イスラエルも、この後間もなくアッシリアに滅ぼされてしまいます。

アハズ王は、主に逆らって異教の神々を拝む王でした。でも、イザヤはアハズに主のことばを語る。そこに神のご計画をうかがい知ることができます。たとえ主に逆らう王であっても、この危機と混乱の時に、主の前に悔い改めて主のことばに従うように、そのような救いの機会を与えるために、アラムと北イスラエルが送られた。それが主のご計画だったのです。

## 2) 信じなければ堅く立つことはできない

しかしどうでしょうか。軍隊がエルサレムをぐるりと取り囲み、自分たちを殺そうと襲おうとしている敵が、跡形もなく消えてなくなってしまうと言われて、すぐに信じられるでしょうか。「恐れるな」と言われてもこわいものはこわい。「落ち着いていなさい」と言われても右往左往してしまいます。

そんなときこそ、私たちの信仰が試されます。9節後半。「あなたがたは、信じなければ 堅く立つことはできない。」神のことばを、本当に神のことばとして信じるのかどうか、もし信じる事ができるなら、堅く立つことができる。しかしそうでなければ、あなたがたはいつまでも風に揺らぐ木の葉のように右往左往するだろう。

## 3) 処女が男の子を産む

コロナが猛威を振るうニュースが連日報じられるとき、「落ち着いていなさい。恐れてはならない」と言われても、皆さんどうでしょうか。とてもできるものではない。ところが納得できる説明をしてもらったらどうでしょうか。ああ、そういうことか、だったらあわてる必要がない。そう思って落ち着ける。聖書も同じです。恐れる必要がない理由を14節で述べる。「それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」

恐れる必要がない理由がこれだと今言いました。しかし、ここでもう一つ問題が持ち上がる。イザヤはこう語ったけれど、では実際にこれが起きたのはいつか。間もなくこの後に起きたというのなら、それを見て南ユダの人たちは大いに勇気づけられて落ち着くことができた、よかったという話して終わります。しかしイザヤの時代に、そんな

ことが実際に起きたとは聖書のどこを開いても書いていない。これはどういうことか。イザヤが嘘を言ったはずはありませんから、どこかで起きたはずです。

## 3 しるし

### 1) ヨセフに告げられたしるし (マタイ1章23節)

イザヤの時代からおよそ735年の後のことです。ナザレに住むヨセフにある夜、夢の中で主の使いが現れ、このように告げました。マタイの福音書1章20～23節。「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。『見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』」

これを読んで初めてイザヤ書7章14節が、私たちのところへ人となって来てくださった救い主イエス・キリストを指していたのだと分かります。

つまり、今日の箇所を少しかみ砕いた言い方に直せばこんなふうになります。

あなたがたは、いま敵を目の前にして心が萎えて風に吹かれて飛ばされそうな木の葉のようになっている。しかし、気を落ち着けなさい。恐れてはならない。あなたがたが恐れているような結果には絶対にならない。そのことが信じられるように、あなたがたに一つのしるしを与えます。やがて処女がみごもって男の子を産みます。その子の名前はインマヌエル「神はわれらとともにおられる」と呼ばれる。その方こそ、イエス・キリストです。この方こそ、あなたがたに与えられるしるしです。

### 2) 信じて待つ

今こんなふうに言い直しましたが、それで納得できたでしょうか。というのは、「一つのしるし」と言われたそのしるしが実際に来てくださったのは、イザヤの時から700年以上も後のことです。今すぐしるしを見せてくださるというのならわかります。ところがいつ起こるのかわからないことを、必ずそうなる信じなさい、そして落ち着きなさいと言われる。このことをどう考えるでしょうか。とても難しいように感じるでしょう。

でも考えてみれば、私たちは非常に幸いな時代にいるわけです。というのは、イザヤ書で語られたことがすでに二千年前に実現したのですから、そ

れで私たちは、主は語ったとおりになさる方であることを知るわけです。過去においてこのとおりであるならば、この先のことはどうなるのでしょうか。それでも、主が語ったとおりになるか信じられない、と言うのでしょうか。むしろ、この先も主が語ったとおりになる、と考える方が自然ではないですか。

コロナが世界をおおって、まるで闇の中に取り残されてどこに向かうのかまったくわからない状態に見えます。しかし、信じるならば堅く立つことができます。しるしは既に二千年前に与えられました。主が再び来られて、まことの光で照らして下さることを、待ち望みます。信じて待ち望む者に、主は不思議な平安を与えてくださいます。